

「青年海外協力隊OB」

伊良部 秀輔さん

IRABU Shusuke

数々の災害に直面する国に
足りない防災意識

トルコ、メキシコ、神戸。世界各地で起こる大地震のニュースを見ては、「どうすれば災害による被害を受けない社会にできるのか」という疑問を長年持ち続けていたという伊良部秀輔さん。大学院で地震学の研究を続けながら、国連人道問題調整事務所（UNOCHA）※でのインターンシップなどを経験し、より自分の専門性を広げたいと思っていた。そんな時、偶然見つけたのが青年海外協力隊の募集。自分の知識や経験を生かせる分野があると知って応募し、見事合格。2011年3月までの2年間、コスタリカの国家緊急災害対策委員会に配属された。

JICA Volunteer Story

PROFILE

1975年沖縄県出身。大学院博士課程（地震学専攻）在籍中の2007年、国連人道問題調整事務所（UNOCHA）神戸事務所にてインターンシップ。09年に同課程を単位取得退学。2009～2011年3月まで、村落開発普及員（コミュニティー防災）としてコスタリカへ赴任。

「災害による被害を減らせる社会をつくりたい」

地震、津波、洪水、地滑り：

自然災害が発生しやすいコスタリカで住民の防災意識向上のため奔走した青年海外協力隊OBの伊良部秀輔さん。帰国直前に起きた東日本大震災の経験をコスタリカ、そして世界へと発信し、「災害から多くの人々を守る」という夢の実現にこれからも挑戦していきたいと考えている。



住民の意識を高めるため、図などを使いながらわかりやすく防災の大切さを伝える伊良部さん

伊良部さんの勤務先は、首都サンホセからバスで4時間の地方都市ニコジャにある同委員会の地方機関。管轄地域で自然災害や人為災害が起こったとき、委員会メンバーである各省庁の最先機関の職員や消防署長、警察署長、NGO代表者などともに対応に当たる組織だ。国の東西に海が広がるコスタリカは、赤道に近く、国土は九州と四国を合わせたほどの狭さ。太平洋側とカリブ海側を分けるように走る山脈に雲がぶつかることで、風向きによって一年中どちらかの地域で雨が降る。そのため、これまでに洪水、地震、津波、土砂崩れ、地滑り、土石流、竜巻、強風などの災害が頻発。にもかかわらず、災害対策は浸透していない。「地震に強い建物や堤防をつくる」といったハード面での防災対策はまだこれから。緊急災害対策委員会も、災害が起こって初めて招集され、そこからその被害に対してどう対処するかを考えるのが現状の主な機能です。防災のために各省庁が予算を捻出することが法律で定められていますが、厳守されていません。また、問題は圧倒的な情報不足。テレビは普及していませんが、もちろん地震緊急速報などのシステムはありません。番組で防災が取り上げられることが少ないため、人々が災害についての知識を個人的に手に入れる情報源が日本に比べてとても少ないのです」と伊良部さんは語る。

人々が防災意識を持てる きっかけづくりを

この現状を踏まえ、伊良部さんが力を入れたのは、阪神・淡路大震災から学んだ教訓を生かし、まずは人々に防災の大切さを知ってもらうこと。具体的な活動は主に二つ。一つは、地域の巡回などの防犯対策を行う住民グループの「地域防犯組織」を活用し、自主防災専用の組織をつくり、それを普及させていくことだ。伊良部さんは各地域でこの組織のメンバーを募



a.3月12日に全国放送された報道番組で東日本大震災が取り上げられ、伊良部さんは日本の避難訓練や防災教育、自主防災組織が担う地域の防災力などについて説明
b.人々の防災意識を高めるため、ニコジャ市中心部の家庭を訪問。この活動には、公衆衛生や看護などを学ぶ地元大学生もボランティアで協力してくれた
c.将来大規模地震が予想されているコスタリカ。地震発生メカニズムも含めた正確なデータや、災害対策委員会の活動をニコジャ市議会で説明する伊良部さん
d.土石流が多発しているコミュニティーでワークショップを実施。発生前にどんな前兆があったかを住民たちで話し合い、情報を共有して今後の防災に生かす

り、防犯に加えて防災に関するワークショップを実施。「グループをつかって町内を回り、危険箇所、避難場所、避難ルートなどを話し合い、防災マップを策定しました。町内の環境改善も目的としているので、危険箇所をどう改善するか話し合う良い機会になっています」と伊良部さんは話す。もう一つは、家庭訪問を通じて住民への防災情報の提供。「救急セットの準備や避難経路の確認など、家庭でできる地震対策が記されたパンフレットなどを手に、一軒一軒回りました。中には「そんなこと聞きたくない」と門前払いをされたり、「地震がくるなんてうそだろう」と怒り出してしまいう人もいた。しかし、伊良部さんは活動を続け、500軒もの家庭を訪問。正しい情報を知り、町全体で取り組むことが何より防災に重要であることを分かっていたからだ。そして帰国が迫っていた3月11日に起こったのが東日本大震災。その影響でコスタリカにも津波が押し寄せる可能性があった。伊良部さんは急いでラジオ局に向かい、「到達予想時刻より2時間前に海岸地域の人は高台へ避難を」と訴えた。新聞やテレビの取材も受け、防災についての情報を発信した。「この経験を、コスタリカの人々がこれからの防災体制に反映してくれることを願っています」。伊良部さんが協力隊の2年間を通じて痛感したのは、コスタリカをはじめ、市民レベルになると最低限の防災対策すら取られていない国がまだまだたくさんあるということ。それはつまり、しっかりと対策を行えば防ぎ得る被害が多いことを意味する。「私の夢は、自然災害による人的被害を世界中で限りなく少なくすることです」と語る伊良部さん。この夏からはJICA専門家として中米での防災プロジェクトに派遣される予定だ。「ライフワークとして、世界で防災に携わっていきたい」。伊良部さんはこれからも夢を叶えるために進んでいく。

※自然災害などでの人道支援を迅速かつ効率的に実施するためにつくられた国連機関。